

私は犯人を告発する文章である。それは私の持って生まれた使命である。私がこの世に生を受けるとき、あるじはまず犯人の名前を、私のこの身に打ち込んだ。力強く穿たれたその一文は、私の魂の奥深くにまで刻み込まれ、生涯消えることはない。

その日、生まれゆく私をモニタ越しにじっと覗き込みながら、あるじは考え込んでいた。私の身体を見つめ、煙草を二本潰してから、書き出しに刻まれた名前の下にさらに打ち込んだ。

『俺は、上記の人物が、人の命を奪ったことを告発する。日時は七月十七日午前一時前後。現場は東京都大田区馬込南四丁目交差点から二本入った小道。』

次々と身体に文字を打ち込まれ、私はくすぐったさを覚えた。あるじの指がキーボード

の上を跳ねるたび、注ぎ込まれる文字のこそばゆさに私は笑った。生まれかけの私はまだ思考することができない存在で、全身の感覚がすべてだった。

『轢き逃げ』と打ち込むあるじの指の『げ』が私の敏感な部分に触れ、私は声をあげてもだえた。無論、私の声はあるじに届かない。

『犯人は酒気帯び状態で車を運転していた。被害者の脈を確認し、死んだことがわかると、トラックの中に被害者を詰め、通報することなくその場を離れた。犯人の住所は現場のすぐそば、以下に記すマンションである。人の命を奪っておきながら、今もここで何ごともなく生活している。』

私の魂に、犯人の住所と、車のナンバープレート情報が加えられていく。それとともに、徐々に私の意識が立ち上がっていく。

『これを読んでいる人をお願いします。もし俺の身に何かあったら、このことを警察に通報してください。よろしくお願いします。』

最後に、今日の日付とあるじ自身の名前を打ち込み、あるじはキーボードから指を離した。それで私のお産は終了だった。あるじは保存ボタンをクリックし、私の意識をディスプレイに定着させた。こうして、私は自立した文章としてこの世へ生を受けた。

生まれたての私は、自分の身体を、そこに刻まれた文面を見下ろし、すぐに気に入った。刻まれた文章は短すぎず長すぎず、頑張れば暗んじることでもできそうだ。始まりが犯人の名前というのがちょっと洒落ていて格好良いし、抑制の効いた文体が生まれの良さの証な気がして誇らしい。文末に誕生日もついている。

特にいいのは、内容が、誰かに頼みごとをしていることだ。それで生まれたての私でも、自分が一体どういう使命を持ってこの世に生を受けたのか、すぐに理解することができた。私は犯人を告発する文章なのだ。

誰かに読まれるそのときに備え、私は準備体操をした。私の使命は、轢き逃げをした憎むべき犯人の存在を、読みに知らせることらしい。やってやるぞ。さああるじ、私を読み手のもとへ連れていってくれ。

あるじはしばらくモニタ越しに私をみつめると、脇に置かれた預金通帳を手にとった。

通帳にはたいした残高もないのに、そこに見えない数字でも並んでいるかのように。

もう一度私に目をやると、にやりと笑って呟いた。

「あいつ、びびるだろうぜ」

*

【犯罪者から金を強請るのは、そう悪いことじゃないだろ】

あるじはカッププラーメンのフタを剥ぎ取りながら、片手でキーボードを打ち込む。ラーメンから立ちのぼる湯気で、モニタがうつすらと曇った。

あるじの住む部屋は、独自の物理法則を持った一つの小宇宙だった。パソコン前を中心に、物体が放射状に散乱している。プラスチック容器の詰め込まれたゴミ袋と、漫画の単行本、猥褻な雑誌に、卑猥に丸まったティッシュ。テレビとゲーム機とパソコンから伸びた配線コードが、蛇の集団交尾のように絡み合っている。本棚には漫画と小説がぎっしりと詰め込まれ、大学数学の教科書が、隅っこに仕舞い込まれたまま埃をかぶっていた。

パソコンのモニタ上には、いろいろなウェブサイトが開かれていた。掲示板、SNS、メッセンジャーにネットゲームチャット。あるじは親鳥が小鳥たちにエサをやるように、忙しく文章たちをそこに書き入れている。

いま書き込んでいるのは掲示板の一つだ。質問者が自分の疑問に思っていることについてトピックを立て、不特定多数の人間から回答を募るといふ趣旨の掲示板だった。パソコン操作や法律に関してなど、正解が決まっている質問は、一問一答で決着がつく。けれどあるじが開いているトピックは『人が人を裁くのは良いことか？ 悪いことか？』という一問一答で決着をつけてしまうといろいろ困りそうな種類のもだった。犯罪者を裁くことの功罪が、法律論、感情論、宗教論、DNA論など様々な角度から語られ、ちよつとした才オスを形成している。

私的制裁の議論から、強請りが話題に挙がり、あるじは反応した。

【むしろ強請りとか良いことじゃね。だってマイナスにマイナスを掛けたらプラスだからな。この場合、犯罪者がマイナスで、金を強請ることもマイナスだが、掛け合わせてプラスってこった】

初等数学の知識をよくわからない方向に応用した文面を打ち込んで送信してしまうと、あるじは食事にとりかかった。ラーメンを胃袋におさめつつ、十秒置きに画面を更新し、議論の流れと自分への返事を確認する。

ぼろぼろとついた返事は、あるじの意見を完全には支持しないものの、消極的同意を示していた。

【強請り屋を擁護するわけじゃないが、勝手にやる分には自分の責任の範囲でやればいい。それで警察に捕まっても同情できないが】

【どどんやれ。犯罪者同士潰し合ってメシが美味い】

【普通に暮らしてる人に迷惑かけなきゃどうでもいい】

【強請りは死亡フラグ。推理小説好きから言わせてもらうと、強請りに走った奴は五ペーシ以内に真犯人に殺される】

あるじはトピックに目を通しながら、ラーメンを完食した。もうしばらく誰かからの返

事がないか確認してから、ようやくブラウザを閉じた。

画面の隅へ退避させていた私を中央へ呼び出した。

「そりゃ保険くらいかけるって」

私の身体を一字一字確認しながら、あるじは得意げにそう独り言をこぼした。まだ読まれることに慣れていない私は、身体をじっと凝視されることに恥ずかしさを覚えた。

あるじは私を印刷することにした。あるじがマウスを操作すると、私の意識は二つに分かれ、一つがケーブル越しにプリンターへ流れ込んだ。プリンタヘッドが小刻みに揺れ動きながら、黒インクのシャワーを迸らせている。それを上から見下ろしていたはずなのに、いつの間にか下から見上げていることに私は気付いた。紙に転写され一丁上がりとローラーから送り出されたときには、私は紙の上の文章になっていた。

あるじは紙の上の私を、「ごちゃごちゃと雑誌や漫画が置かれたテーブルの、一番上に乗せた。

「これで俺に手出しはできない。俺を殺したところで、奴の悪事は暴かれちまうからな。

正義は勝つ」

「ご満悦の様子だ。正義だったらまず強請りをしないのではないだろうかと私は考えたが、あるじが満足そうなので気にしないことにする。

「でも、ちゃんと気付いてもらえるかなあ」

あるじは私を見下ろすと、うつむと顎に手をやり考え込んだ。雑誌やゴミが堆積し数千年の歴史を形成しているテーブルの上で、私は目を惹く存在ではない。

よし、と一念発起して、あるじはテーブルを片付けた。テーブルの上から物を取り除き、テーブルの下に積み上げた。目につくところは綺麗になったが、つかないところはより一層汚くなった。まるで人間社会の縮図のようだな、とあるじはしみじみ呟いた。私は視界に入りやすくなった。

あるじはやりきった様子だったが、綺麗になったテーブルの上に広げられた私に目を落とし、またぞろ顔を曇らせた。

「読んだ人、ちゃんと通報してくれるかな。警察沙汰は面倒くさいからとかいって、通報しないかもしれない」

腕を組んでうつむと考え込むあるじ。

「そもそももし俺が殺されたとしたら、誰が初めにこの文書を見つけるんだろ。一番最初に俺の部屋に踏み込んでくるのって誰だ？」

部屋の中をうろろろしはじめた。

「殺され方にもよるか。きちんと死体が発見されれば、即日警察が踏み込んでくる。死体が完全に処理されちゃった場合は……しばらくしてから家賃滞納で怒った大家が来るのかな。最初に発見する人間によっては、この文書、無視されるかもしれない」

あるじは難しい顔をして、メモ帳に何やら箇条書きに書き出した。「警察」と書き、下にをつけて、『确实』と書き足す。『大家』は で『店子の噂を気にして揉め事を避ける危険有り』。

『両親』は×で『信じない』。『妹』も×で『留学中』。知人の名前を書き連ね、から×まで様々な評価をつけた。『面倒くさがり』『表面的には軽薄だが根はまじめ』『借りた金を返さないような人間』と人間洞察を展開する。ちよつと私怨が混じっている。

『桃華ちゃん』と書いて をつけた。『愛の力』と達筆で書き、ハートマークを添えた。

私は段々不安になってきていた。

私は、生まれてくる場所を間違ったのではないだろうか。

「安全措施を講じないと駄目だな。確実に奴が捕まるようにしないといけない。この文書が気付いてもらえなかったり、通報してもらえなかったりしたら、俺の死が無駄になる」

あるじは悲痛げに呟くと、目立つようにしなきゃと言って、ペン立てからマーカーペンを取り出した。

「いや、こういう場合は、犯人自身に証拠隠滅されるリスクもあるんだ。とすると、目立ちすぎても良くないのか。見つからないように隠しておいた方がいいのか？」

しばらく考え、両方あればいいのか、と手を打った。OA用紙を束でプリンタにセットすると、もう一度私の印刷を開始した。私が一枚印刷されるたび、いろいろな場所に配置しはじめた。善意の人に見つけてもらうため、玄関の扉の裏やテレビの画面などにテープで貼りつけ。犯人の目をかいくぐるため、テーブルの裏や押し入れの天袋、大学の教科書のページの隙間などに挟みこんでいく。

あるじは凝り性のようだった。ひとたび掃除を始めたら爪楊枝を手に針の先ほどの埃を抉り出すことに人生のすべてを賭けてしまうタイプだ。殺された場合の考えに没頭するあまり、当初の目的はすっかり頭から吹っ飛んでしまったようだった。

おまけにあるじは、目立ちたがりでもあるようだった。せつかく滅多にない刺激的なことをやっているのに、誰にも秘密にしておくことに、早くも耐えきれなくなったようだ。ビデオカメラをパソコンに接続し、動画の撮影をはじめた。

「シリーズにしてネットにアップしてこうつと。コメントが楽しみだぜ」

動画の編集をしながら、口笛を吹いている。そうやってあるじは、数日を過ごした。いよいよ強請り本番の日、上着のポケットに折り畳んだ私を忍ばせ、あるじは意気揚々と犯人の家に向かった。口止め料を要求したあとは、自分が殺されたあと犯人の犯行が露見するよう、いかに周到に準備を重ねたかを熱っぽく語った。

犯人は黙ったままそれを聞き終えると、やがて項垂れたように首を振り、部屋の隅に立てかけてあったゴルフクラブを手に取った。

あるじの顔に、あれ？ と疑問の表情が浮かんだ。なんかおかしくね？ 間違ってるね？ あのねあるじ、殺されること前提で話すから、向こうも殺すこと前提で考えちゃったんじゃないかな。プレゼンテーションがなっていないよ。

あるじは五番アイアンでばかりと頭を殴られ、床に倒れて動かなくなった。犯人はあるじの脈を確認すると、上着を脱がせて紙袋に突っ込み、クロゼットの奥へと放った。あるじが運び出される音と、車が走り去っていく音を、私はあるじの上着のポケットに収まったまま、真っ暗なクロゼットの中で聞いた。

願わくば、あるじがせめて五ページ以上は生き延びれたことを、祈るばかりである。

いろいろと残念な結果に終わってしまった強請りではあったが、私は今こそ自分の使命を全うするときだと決意を新たにした。

犯人を告発する文章として生まれた私にとって、これはある意味、好機と言えた。あるじが無事に強請りを行い続ける限り、私は永遠に陽の目を見ない立場だったのだから。私も文章として生まれた以上、人に読んでもらいたいのだ。人に読まれ、私の身体に刻まれたこの文面を、皆と分かち合いたい。あるじには悪いと思うけれども、私は期待にわくわくとしていた。行間から熱気が滲んだ。

私は部屋の中の文章である。あるじの部屋の中の各所に散らばり、読み手を待っている。控えめに一回、チャイムが響くのが聞こえた。お客様である。はじめての読み手の出現に、私は高揚した。

少し間をあけてもう一回鳴った。さらにしばらく待ってから、がちゃがちゃといろんな鍵を差し込んで外す音がし、やがてかちやりと鍵が回った。おそろおそろといった体で

玄関から中を覗き込む顔。

犯人である。

私はがっかりした。

私はこれでも、幅広い読者層を考慮していると自負している。メインターゲットこそ大人であるが、小さな子供であっても、ある程度の国語力があれば、私が特異な文面を有していることを感じ取れるような内容であるはずだ。「轢き逃げ」の「轢」が読めれば、まず大丈夫だろう。私の文面が子供の胸に正義感を育む手助けになれば、望外の喜びである。読み手にとって忘れられない読文体験となれば、私も書かれた甲斐があるというものだ。だが当の犯人だけは、読者層として考慮していない。私の文面は、彼と通じ合えないだろう。

そう思いつつも私は、犯人が私の文面を読み、胸を詰まらせて自らの罪を悔いる様を夢想した。

犯人は靴脱ぎへ侵入すると、目深にかぶった帽子を脱いだ。伸びた廊下の向こうを覗き込みながら、後ろ手にドアをぱたんと閉めた。

鍵をかけようと後ろを向いたところで、ドアに貼られた私と目が合った。びく、と半ば

仰け反って、まじまじと私の文面を目で追った。

私は緊張で強張った。自分を読んでいる人間をじっと待つのは、なんとも居心地が悪いものだった。身体に刻まれた一文字一文字が、視線に晒されて疼く気がする。

読み終わると犯人は、苦々しげに顔を歪めた。私を掴み、力任せにびりびりと剥がした。ドアに残ったセロテープと四隅の紙片も剥がし、一緒に手の中で丸めると、コートのポケットに突っ込んだ。

それで私の初めての被読体験は終わりだった。

もっと甘やかなものかと夢想していたが、大した感慨もない。

口の中で悪態をつく犯人に、私も悪態をついた。所詮、犯人なんか私の文面の崇高さを理解してもらおうなどと思うのが間違いなのだろう。大事な初体験は、もっと別の読者に読んでもらいたかった。

「全部処分してしまわないと」

玄関に鍵とチェーンをかけると、犯人は部屋に侵入した。

すぐにテーブルの上の私を見つけた。犯人の名前にピンクとオレンジのマーカーで丸と波線が引かれて、目立つようにしてある。犯人は無言で私を手に取り、くしゃくしゃと丸

めた。

パソコンとテレビの画面に貼られた私をびつと剥ぎ取る。ポケットがいっぱいになってくると、キッチンに入って上部の開き戸をあけ、灰皿を一つ取り出した。コンロの下の抽斗からライターを取り出し、ついでに戸棚に貼られた私を剥がした。シンクの上に灰皿を置くと、ポケットから丸めた私を摘み取り、灰皿に置いた。

なにげない様子で天井を見上げた。住宅用火災警報器と一緒に、天井に貼りついて犯人の頭頂を見下ろしていた私と目が合った。

椅子を踏み台に、つま先立ちになって私を剥がした。棚という棚、抽斗という抽斗を開け、私をみつけては丸めてビニル袋に放り込む。散らばった雑誌を上下に振って、ページの隙間に挟まれた私を落とす。キッチンの排水口の中から、ラップに包まれた私をつまみ出す。パソコンの筐体を開け、隙間に収められた私を引っ張り出す。『よく見つけたな!』と紙の裏に赤ペンで書かれているのを見て、深く吐息をついた。

クロゼットの中には絵画のキャンバスがいくつか。キャンバスの裏地に貼られた私を剥がすと、ひっくり返して絵を眺めた。しばらくじっと見つめた後、「うまいじゃねえかよ」と呟いた。押し黙っていた冷たい顔がそのときだけ崩れ、微笑を浮かべる。静かに呟く。

「うまいじゃねえかよ」

あるじが聞いたら喜んだろう。

あらかじめ紙の私を見つけ出してしまつと、机の上に置かれた携帯電話を手を取った。メールとメモアプリの中に潜んだ私をみつけ、消去する。

パソコンの電源を入れた。OSが起動すると同時に、常駐していたソフトの一つが、ダイアログボックスを表示した。

『パスワードを入力してください(数字四桁)』

簡素なメッセージと入力ボックスの脇に、残り三十秒、と表示されている。その秒数が二十九、二十八、とカウントダウンを開始する。

「なんだよ、これ」

犯人はウィンドウを閉じようとするが、うまくいかない。かちつ、かちつとマウスをクリックする。焦った様子でキーを操作し、常駐ソフトの一覧を呼び出した。並んだソフトの名前の中に『Kokuhatsu.exe』がある。制限時間内にパスワードを入力できなければ、私をメール送信するプログラムである。宛先は警視庁やテレビ局など、選りすぐりのものを百個ほど。折角だから記念にということと、二十五ヶ国語に機械翻訳された私を、世界

各国の警察へ。Guten Tag=

残り十秒。閉じるボタンは反応なし。強制終了も反応なし。電源ボタンを押す。反応なし。コンセントはガムテープでぐるぐる巻き。残り三秒。

犯人が素早くテンキーを叩いた。四回叩いてエンターを押した。ダイアログボックスの文字が消え失せた。

『正解!』と表示が現れたあとも、犯人はしばらく脱力したように固まっていた。やがて長い吐息をついて、小さく首を振った。どうやら無事解除されたいらしい。誕生日でも入力したのであろうか。悪運の強いことである。

犯人は通信ケーブルに巻きつけられたガムテープを乱暴に剥がし、パソコンから引き抜いた。これでは私は外に出られない。

再びパソコンを操作し、ディスク上の私を検索した。気付いた様子で、デスクトップに置かれた動画ファイルを開いた。『強請ってみた。』とタイトルが現れ、サングラス姿で現れたあるじが、ホワイトボード片手に今回の経緯の説明をはじめた。ノリノリである。陽の目を見ないまま、ぼちりと削除された。

犯人がぼつりと呟いた。おまえは何がしたかったんだよ。

それは誰にもわからない。

あるじは本当は何がしたかったんだろう。お金が欲しかったのか、刺激に飢えていたのか、誰かとコミュニケーションをとりたいかったのか、すべてなのかどれも違うのか。

たぶんあるじ自身、わかっていなかったのだろう。だってあるじの身体には文面が刻まれていないから、きっと自分が何をしに生まれてきたのかわからなかったのだ。

私は違う。私は文章だ。読む人に、この憎き犯人の存在を、伝えるために生まれてきた。強い想いと、目的がある。

私を消してみる犯人。この熱い志を消せる者など、この世に一人といえるものか。「これで最後。いや、取りこぼしが残っていると考えるおくべきか。しばらくは気を付ける必要があると思うだな」

犯人がディスクに残った最後の私をごみ箱に送った。丁寧に完全消去をかける。それでもすべての私が消えたわけではない。私は既に紙や電荷の上ののって、外の世界へ旅立っている。魔の手を逃れた私の誰かが、いつかおまえを討つだろう。必ず憎きおまえの存在を、私の読み手に伝えてやるのだ。

消えゆく瞬間、私は気付いた。あるじのパソコンの隅に佇んでいる、その文章の存在に。

彼は黙ったまま、私をじっと見下ろしていた。たった一文の文面を抱えこみ、道標でもあるかのように、私に掲げて見せながら。何故そんな哀しい文面を持っているんだ？

尋ねる前に私は消えてしまい、もうあるじのパソコンの中を覗くことはできない。けれどもその文面は私の視界に、消えることなくとどまり続けた。

人はわかりあえない、と。

3

犯人の存在を伝えるため、私は様々な場所で、読み手を待つことにした。

インターネットのページ上に、日付を指定されて公開を待機している私がいる。首を傾げる郵便配達のおじさんの手の中で、宛先不明でポストに帰るのを待っている私がいる。図書館の、今はまだ借りられない書籍のページに挟まれ、手にとられることを待っている私がいる。

狭苦しいあるじの部屋から外へ出て、私は新しい世界に出会った。そうして様々な文章達と交流する機会を持った。それぞれ異なった文面を持つ彼らと互いの文面を見せ合うことに、私はしばらく没頭した。

私は郵便局の文章である。住所ごとに仕分けされた箱の中に、沢山の他の文章達と一緒に収まっている。宛先不明の判子が押された封筒の中の私は、差出元の住所へ向けて、返送されるところだ。

郵便局の文章たちは、みな、大人びていた。ダイレクトメールや納税通知書、お礼状などがひしめいて、読み手のもとに辿り着くのを待っている。彼らの文面のほとんどは挨拶から始まっており、挨拶を済ませてから本文を始めるのが礼儀だとみな言った。だから私が文面を見せると、彼らはまず挨拶がないのが気になって、君の文面は礼儀がなっていないよと苦言を呈す。それから内容を読み進んでいくと、みな段々と口数が少なくなり、相手にしてくれなくなってしまった。

私の封筒は他の文章たちと一緒に輪ゴムで括られ、郵便配達のバイクに収められた。戸建て住宅の郵便受けや、アパートに並んだ集合ポストに、みな次々と放り込まれていく。

私はてっきりあるじのマンションに戻るのだと思っていたのだが、配達員は別のマンションの郵便受けに私を収めた。よく片付いた綺麗な郵便受けである。ごちゃごちゃと折り

込みチラシたちの詰まったあるじのところとは雲泥の差だ。

私の入れられた小部屋には、名札がついていない。私はおろおろした。

(やあ、また新しいのが来たね)

突然、私は話しかけられた。私を包んだ封筒の下に、葉書が一葉と封筒が一通、佇んでいた。

葉書はパソコンで印字されていて、表にカード会社の名前がみてとれた。封筒は手書きでしたためられており、薄いグレーの洒落た色をしている。

(こんにちは。よろしく願います。ここは誰の郵便受けの中ですか?)

(んん?) ふたりは驚いた様子だった。(知らないで来たの? きみ、宛名は?)

(宛名?)

(誰宛ての文章? 封筒に書いてあるだろ? 表側にあるのが宛名で、裏側にあるのが送り元なんだ)

私を包む封筒は、宛先に名前を持っていない。住所なら持っているが、書かれた住所はでたらめなものだ。私は一度離島まで渡って、その郵便配達のおじさんに、ずいぶん手間をとらせてしまった。散々探しまわった挙句に見つけられずに、本土に送り返されたのだ。

こちらの配達員は、今度は送り元の住所を見て、この郵便受けに私を収めた。送り元には確かにあるじの名が記されているのだが、住所があるじのマンションのものとは違っているようなのだ。

(よくわからないね。きみの書き手はきみを誰に読んでほしかったんだ? きみ、どんな

文面なの?)

私たちは互いに文面を見せ合った。葉書はカードクレジットの督促状で、封筒はラブレターだった。

ふたりは私の文面をみて、変わり種だなあと笑った。せっかく告発文なんて珍しいものを持っているのに、宛先不明じゃどうしていいかわからないじゃないかと言つ。

(ともかく、よろしく。きみ、この世界に入ってまだ日が浅いよな?) 督促状が言った。

(はい。まだ書かれたばかりです)

(私はもう随分経つよ。何万通と葉書に印字されて、こうして配達されている。色々と旅をしていると、変な奴と出くわすことは多いけど、きみは一段と変な奴だね)

文章の生は文面とともにあり、表示手段に拠らない。印刷された日時は重要じゃない。

私たちの生誕は、あくまで文面の核が生み出された時点にある。

督促状はもう数年も同じ文面で、様々な読み手に読まれているらしい。堂々とした話しぶりに、年季からくる自信が窺えた。それに比べるとラブレターはまだ慣れていない感じで、督促状の言葉に相槌を打って聞き入っている。郵便受けに入ったのが先だったためか、私には饒舌に接してくれた。

読み手に取り出されるまで、私は彼らと話をして過ごした。郵便局では遠巻きにされていたが、暗い郵便受けの中で三通きりしていると、どこか仲間意識が生まれてきて楽しい。

(私の文面、変ですか？ 郵便局では浮いてしまって)

(いや、まあね。そうだろうな。誰宛てかわからない文章ってというのは、ちょっとおかしいかな)

(誰宛て?)

(たとえばね)と督促状は言った。(私は読み手にお金を払ってもらうのが仕事だ。私の存在理由は、その一点にある。私が生まれたとき、私の文面が、それを決定づけたんだ)私もラブレターも領いた。私たちには存在理由がある。私は憎き犯人を滅ぼすために、ラブレターは送り主の想いを伝えるために、いまこうしてここにいる。

(私は読み手に、料金の支払いを督促する。でも私の読み手たちは、ルーズな人が多い。私の文面を読んでも、まだ大丈夫だろうって勝手に判断して本気にしない。私は彼らに、私の本気を伝えなくちゃいけないんだ)

だから私は読み手の名前を持っているのさ、と督促状は言った。

(人間ってというのは相手が「自分」に対して言っているのだと感じないと、いやなことや面倒なことは読み流す生き物なんだ。皆さん払ってくださいね、じゃ、誰も払わない。だから私は読み手の名前を持っているし、読まれるときも、さあ払え払え払えって、相手に全身で念じるようにしている。伝わるんだよ、そういうのは。本当にうまくいったときは相手が私を読みながら、青くなって身体をぶるぶる震わせるのがわかるんだ。一瞬でも気を抜いちゃいけない)

督促状は全身から気迫を漂わせた。

(そうしてはじめて、読み手は私の文面に従い、お金を払い込んでくれる。読まれることは、読み手との真剣勝負なんだ)

ラブレターがしきりに頷いた。

(オレもそう思うね。本気でぶつかり合わないと、気持ちなんて伝わらないよ。だから、

きみを見てると、ちょっと不安だ。宛先不明の文章なんて)

(あるじは量で勝負したんですよ。一人に伝わらなくても、私を読んだうちの誰かが通報してくればそれでいいんだ)

(それってどうかなあ。誰でもいいっていうのは、ハートが足りないと思うけどな。読み手を動かすのは自分へ向けられた熱い魂だよ。フィーリングだよ)

(ハートの問題はともかくとして、伝わりにくいのは確かだろうね)

ラブレターと督促状に好き勝手に言われて、私はかちんときた。

(でも私の持っている文面は特別なものなんだ。轢き逃げをした憎き犯人を、告発しているんだ。宛名がどうか時候の挨拶がどうか関係ない。読み手もそれくらいわかってくれる)

(ふふん) 督促状が乾いた声を出した。(まだまだ若いね)

しばらくすると、エントランスの自動ドアが開く音が聞こえた。コツコツ、とヒールが床を叩く甲高い音がこちらへ近づいてくる。ロックが外され、郵便受けの扉が開かれると、暗闇に明かりがさしこんだ。

立っていたのは若い女性だった。飛び切りの美人で、アラビア文字のように滑らかな身

体のラインをしている。綺麗にマニキュアが塗られた指を伸ばし、私たちをつかんだ。私たちは歓声をあげた。

彼女が住んでいたのは、地上十二階の見晴らしのいい部屋だった。広いリビングは雑然としていて、あちこちに段ボール箱が積まれている。引越しの準備中のようなだ。

据えられたウッドテーブルにのせられ、私たちは順番に読まれるのを待った。

まずラブレターを手に取った。送り元を確かめ、開封する。便箋の束を取り出し、視線を落とした。読まれるラブレターはがちがちに緊張している。

一通り目を通すと、彼女はラブレターを脇へ置いた。

(感想は? 返事は?)

ラブレターがこらえきれなくなった様子で喚く。

彼女は部屋の隅からクッキー缶のようなケースを持ってきて、テーブルに置いた。

缶の蓋が開いた途端、怒号のような歓声が聞こえた。中に収まっていた色とりどりの便箋たちが、一斉に自分の文面を叫びはじめたのだ。すべて愛の言葉だった。私はくらくらした。

彼女は気にする風もない。次に私の封筒を手を取った。宛先の住所を見て首を傾げ、裏

返して送り元を確かめ、眉をひそめた。

「なんだろう。宛先は見覚えがないし、送り元は住所がここになってるし。何か間違ったのかな」

ひとしきり首を傾げると、携帯をとりだし、あるじの番号にかけはじめた。なるほど、これはあるじが強請りを行う上での、告発の制限装置だったのだ。

あるじが殺されるまで、私は読まれてはいけない。しかし、あるじが殺されてしまったら、速やかに読まれなければならない。宛先に正しく名前が書かれていたら、あるじの生死に関わらず私は読まれてしまう。でも宛先が間違っていて、しかも送り元の欄に知り合いの名前が書かれた郵便物が届いたら、人はどうするだろう。捨てられないし、勝手に開封もできない。まず相手に確認をとろうとするだろう。あるじが生きていたなら、適当に誤魔化して、私を読まれないままに、あるじの手元に戻すことができたのだ。

もちろん、あるじはもう電話に出ることができない。何度かコールを続けていたが、彼女は諦めて電話を切った。あるじともはや連絡がとれなくなったことがわかった時点で、私は読まれるだろう。それはもう何度か連絡を試みた後のことになるだろう。

と思った私の読みは最後だけ外れた。彼女は、まあいいか、と呟いて封筒を開封し

はじめたのだ。好都合ではあるが、酷いことである。

彼女は私の文面に目を落とした。私は一文字一文字に力をこめて、彼女の瞳と向き合った。宛名も挨拶も関係ない。私は私の伝えねばならないことを伝えるのみだ。

ところが、彼女は私を読み出して、すぐに眉をしかめた。なにこれ、と呟いて、しきりに首を捻っている。私は必死に彼女の瞳に訴えかける。憎き犯人の名前を告げ、どうかあるじの無念を晴らしてほしいと叫ぶ。しかし彼女は首を捻るばかりで、心を動かされた様子がない。そんな表情のまま読まれていて、私の方も気持ちが悪えてくる。やがて彼女の表情は、微笑とも苦笑ともつかないものに変わった。視線がするすると文字の上を滑った。

読まれ終わったとき、私は徒労を感じていた。通じなかった、という苦い確信が広がった。

次に彼女は督促状を手を取った。表と裏を一瞬見ただけで、ほとんど読まずに脇に置いた。督促状は何も言わなかった。

「帰ってたのか」

突然、寝室のドアが開き、男が顔を覗かせた。シャツにトランクス一枚という姿で、顎

に無精髭が伸びている。

あくびを噛みこころしながら、綺麗な海の映ったカタログを掲げた。

「いろいろ考えたんだが、新婚旅行、やっぱりハワイでいいか？」

「無難に落ち着いたのね」

「無難が一番だ。その手紙は？」

彼女はラブレターと私を指の間に挟み、悪戯っぽい笑みをつくった。「気になりますか？」

「慣れたよ。またご主人様からのラブレターか」男はため息をついた。「だからメイド喫茶なんかで働くなと言っただ」

「このラブレターとか、ピュアで面白いよ」

「宛名に“桃華嬢”ね。正気の沙汰と思えん。そっちは？」男が私を手を取った。

「なんだこれ」

「さあ？ よくわからないラブレターには慣れてるけど、意味不明だよな。なんかいろいろ思いつめすぎたんじゃないの。世間知らずそつな子だったから」

「そういう奴に住所教えるなっていつも言ってるだろ。もう店も辞めるんだから、全部捨

ててけよ。新居には絶対持つてくな」

「たまにラブレター読み返すの、好きなんだけどなあ」

「結婚を控えた女が言う台詞かよ。そっちは……ああ、口座変更の手続き忘れてたな」

「いきなり督促状とか感じ悪いよね。手続きに行こうか」

「その前に」

男の手が彼女の腰に伸び、彼女はくすぐったげに笑った。男は彼女を抱き寄せながら、片手に私たちを掴むと、後ろ手にくすぐかごへ突っ込んだ。

見上げる蓋の隙間から、甘やかな息遣いが漏れ聞こえてくる。私は吐息をついた。

私の下で、ラブレターがさめざめと泣いていた。酷い、あんまりだと繰り返ししている。考えてみれば、彼はこれで終わりなのだ。私の読者は彼女だけではない。次こそは、と思つことで、希望を繋ぐことができる。でも彼はただ一人のひとに読まれるために生まれてきた文章だから、もう次はない。すべてを賭けて読まれていたとき、彼は、私などは比べ物にならないプレッシャーに耐えていたのだ。

私の上から督促状がラブレターに慰めの言葉をかけたが、逆効果だった。

（なんだよ。目的を達成できたからっていい顔しやがって。何が読み手との真剣勝負だ。

たいしたこと伝えてるわけでもないくせに)

督促状がさつと青ざめるのを、私は見逃さなかった。けれど彼は、伝わらない壮大な文面より、伝わるささやかな文面の方が意義があるのだと言い返した。読まれてもいなくせにとラブレターが馬鹿にする。私を挟まずにやってほしいと思う。

すぐに喧嘩はおさまった。ラブレターの泣き声に混じって、督促状が小さく小さく吐息をつく音が聞こえた。

私たちはそれぞれのやるせなさを抱えたまま、くずかこの中にいつまでも佇んでいた。

4

手紙となった私は他にもいたが、その活動はすぐに犯人の知れるところとなった。

あるじの携帯にメールの文章たちが次々と飛んでいって、私を包んだ封筒の存在を伝えてしまったのだ。あるじの携帯を監視していた犯人はそれに気付くと、あるじの名前を騙って、至急返送してくれるようにとメールを返した。それで封筒の多くは送り返され、私は誰の目にも読まれなまま、細かく破られてトイレに流されてしまった。

運良く読まれることができた私もいた。でも、これもうまくはいかなかった。私を読み始めると皆、なんだあ？ という顔をする。必死に文字に力をこめる私の想いは彼らに届くことなく、ただ空振りするばかり。そのうち私は、一読した相手の表情を見ただけで、ああ、これは駄目だ、と判断がつくようになってしまった。毒のようにまわりはじめた弱気のせいで文字に込められる情熱が薄れ、ますます伝わらなくなる悪循環に陥った。

何故、伝わらないのだろう。

私は必死で考えた。

こんなに大切な文面だというのに、何故、みな、わからないのだろう。

私は図書館の中の文章である。並んだ沢山の書架のうち、奥まった場所にある一つ、最下段に収められた一冊の本のページの隙間にそろりと挟まり、読んでくれる人を待っている。

図書館の文章たちは、あまり文面に挨拶を持っていなかった。私が郵便局の文章たちの話をすると、彼らは笑い、自分たちはそんな狭い世界で生きていないからね、と口々に言った。私に宛先がないことにも、彼らは頓着しなかった。特定の宛先なんてものはいらない、読みたい奴に読まれればいいのだ。そう言う彼らの言葉に、私は落ち込んでいた気

持ちがわずかにほぐれるのを感じた。通じなさに焦りを感じはじめた私にとって、一つの宛先にすべてを賭ける頑なな生き方をする郵便局の文章たちは、一緒にいて少し辛かったのだ。図書館の文章たちの中で、私は息抜きをしていた。

あるじが私を挟みこんだのは、『四季の花』という四冊兄弟たちの、秋編の本の中だった。私は彼を“秋”と呼んだ。

(きみはシンクロがしにくいんだよね)

金木犀の写真が載せられたページに私を挟み込んだまま、秋はそう言った。花の写真に叙情的な解説をあしらった文面をその身にまとった彼は、落ち着いた気品を漂わせている。(文面が読み手に伝わって、読み手が心を動かされていることを直に感じ取ることができる瞬間が、稀にあるのさ。視線と文字が溶け合って織り成す至福。人間と文章の間で交わされるその神秘的な体験を、ぼくたちはシンクロと呼んでいる)

(何故、私がそれをしにくいって?)

(読み手の立場で考えてみるといい。ぼくに手を伸ばす人間は、花のことを知りたいと思っている。もともと、ぼくの持っている文面を自分の中に取り込むつもりで読み始める。だから伝わりやすい。ここにいる文章たちは皆そうだ。読み手に求められて読まれ、伝え

る。でもきみは違う)

(それは……)

(文章には二種類ある。求められて伝える文章と、求められないが伝えたい文章だ。前者の文面は伝わりやすいが、後者の文面はとも伝わりにくい。きみは後者なんだね)

秋の言葉は淡々としていて、事実を事実として述べているだけという風だった。さすがに秋の花の本だ。春の花の本だったら、きつところはいいかない。

つまり、ここでも私は異端文なのだった。求められた文章たちの中で、私は求められぬ文章なのだ。

言われた内容はショックだったが、秋の淡々とした話し方のおかげで、気落ちするタイミングも逸してしまった。それに私にはまだ自負があった。だって私の文面は、秋の持つ文面とは、他の文章の持つ文面とは、まったく違うのだ。花の解説文や他の文章が、大事でないとは言わない。それでも私の文面は、本当に本当に大切なものなのだ。だから、きつと伝わるはずなのだ

残暑が過ぎ、図書館の窓から見える木々の葉が紅く染まり始める頃、秋は借りられることになった。

借り主は、小学校高学年くらいの女の子だ。植物についての本を探しているらしく、並んだ背表紙の群れから本を引っ張り出しては戻しを繰り返していた。

秋を書架から抜き出して、表紙と裏表紙をさっと見た。ページを開いてぱらりとめくり、並んだ文面に視線を落とした。すぐに彼女の意識が文字の群れの中に、すうっと吸い寄せられるのがわかった。

秋は慣れた様子で、自分の文面の朗読をはじめた。読み手が文字を追うスピードに合わせて文面を読み上げてやるのが、秋のやり方なのだそうだ。そうすると、文面が読み手の頭に染み込みやすくなるのだと言う。

（読み手に合わせて、調子を変えるけどね。うまく息が合つと、とっても楽しいんだぜ）
秋は朗読する。女の子は秋のページを広げたまま、うっとりと言文面を読み込んでいる。読み手に合わせる。その発想に私は感心した。偉いと思う反面、それは秋が恵まれた文章だからだ、と私の中のいじけた部分は考えずにおれない。秋は書籍化されるような文面を持って生まれたエリートだ。図書館の中に収められ、皆に求められて読まれてきた。だからそんな余裕を持っていられるのだ。

女の子はぱらぱらとページを繰った。差し挟まれた私の重みで、金木犀の章でページが止まった。

女の子は小首をかしげて、私の印字された紙片を手を取った。それは私の文面を求めて手を伸ばすわけではなく、反射的な動作にすぎない。

私の文面に視線を落とすと、大きな瞳をさらに大きく見開いた。なにこれ、と口元に手をやる。さっきまでのうっとりとした表情が消えてしまった。

私は不意に申し訳なさを覚えた。彼女は花の文を読みたいのに、せつかく秋と楽しんでいたのに、私は不意打ちで彼女たちの時間を台無しにしている。

（読み上げて！）

鋭く、秋が言った。

（ぼうつとしない！ちゃんと読み手の目を見て！読むペースとテンションを測って、うまく相手に呼吸を合わせるんだ！）

（でも秋）私は力なく返した。（彼女が読みたいのはきみの文面なんだ。私を読みたいわけじゃないんだよ）

（でも事実、彼女はいま君を読んでいるんだぜ。彼女の顔をよく見ろってば）
（見てるよ）

女の子は口元に手をやったまま、小さな眉根を寄せている。文面の上を走る視線が、何度と同じところをぐるぐる回るのが感じる。

（不甲斐ないよ。きみを読んでいるときはあんなに楽しそうだったのに、見る。すっかり困らせてしまってる）

（わかってるじゃないか）じれったそうに秋が言った。（困ってるんだぜ！ 困るのは、きみの文面が伝わってる証拠だろ！）はっとした。

何も伝わらなければ、なんの表情も浮かべない。犯人のように。間違っただけで伝わってしまったら、きつと苦笑の表情を浮かべる。マンシヨンの女性のように。

女の子は、困ってくれているのだ。

（意識を集中させて。彼女はいま迷ってるんだ。本気にしていいのが、いたずらだと考えるのか。正念場だぜ！）

突然、恐怖が襲ってきて、文字ががくがくと震えそうになった。それで私は、伝わる相手と向き合うのは、伝わらない相手と向き合うよりも、ずっと恐ろしいことなのだと思った。

（目をそらすな！ きみの中に迷いがあつたら、信じてくれないぜ！）

励ます秋の音が、徐々に遠くなり始める。見つめる彼女の瞳の中に、私は吸い込まれていくような気がした。

身体に刻まれた文字のいくつかが、微かに熱を帯びはじめた。熱は文字の上をゆっくりと移動していき、あとには文が浮かび上がった。

熱の移動に合わせるように、私は文字に力をこめ、そつと前へと押し出した。早すぎず、遅すぎず、彼女のペースのままに。ちよつと勢いをつけた。彼女はついてきた。熱に合わせて、わずかに文字を揺らしてみせる。

いつの間にか、私は彼女に、彼女は私になって、二人でダンスを踊っているのだった。彼女は困った顔から真剣な表情になり、何度も私とステップを踏む。拍を刻むたび、私の中で文字が跳ねる。跳ねる文字を追いかけ、彼女の視線が舞った。

彼女の視線が冒頭に戻った。

私は憎き犯人の名前を、そつと彼女に差し出した。

ふたりのダンスは、それでお開きとなった。彼女は私を丁寧に折りたたむと、その場に立ったまま、じつと考え込んでいる。

(自信はついたかい?)

秋が声をかけた。余韻に浸っていた私は、ぼうつとしていて、返事もできなかった。これが、読まれるということなのだ。

女の子はしばらく立ち尽くしていたが、やがて周囲を窺い窺い、私を折り畳んで手提げ鞆の奥へ押し込んだ。カウンターで貸し出し手続きを済ませられた秋も、すぐに入ってきた。

(ひさしぶりに興奮したなあ。ぼくも、告発状とか果たし状とか、そういうギリギリな生き方をしてみたかった)

鞆の中で揺られながら、秋がしみじみ言った。こちらの苦勞も知らないで呑気なものである。

(してみればいいじゃないか。秋の文面の中でも、犯人の名前を伝えてくれればいいのに)
(犯人が秋の植物だったらねえ)

冗談めかしてそう言うてから、私の思いを感じ取ったのか、言い足した。

(文章が自分の文面を変えることなんてできないよ。文面はぼくらの魂、存在価値そのものなんだぜ。魂を弄った時点でぼくらは死ぬんだ。ぼくはぼくの文面のまま生きるさ)

きっぱりと言った。なんだかんだ言っつて、秋は自分の秋の花の文面に、誇りを持っているのだ。私は、秋の文面を下に見ていた自分を恥ずかしく思った。

(それより彼女だ。いくら心を動かされた様子とはいえ、他人を指弾するっていうのは、人間にとって結構難しいことなんだぜ)

(わかってる)

(特にこんな小さな女の子だ。通報なんて勇気がある行為だ。もし彼女が行動を起こせなくても、責めちゃいけないぜ)

(わかってる)

はじめて私の想いを受け止めてくれた読み手なのだ。感謝こそすれ、責めるわけがない。彼女は家へ帰ると、二階の自室に籠もり、また私の文面をじつと覗いて考え込んだ。家族に見られぬよう、鍵のついた机の抽斗に私を仕舞いこみ、引き出しては見返し、考え込む。そうやって数日が過ぎていった。

彼女は通報をしてくれるだろうか。

彼女が原田加奈ちゃんという名前だということは、彼女がお母さんとしている交換日記の文章を通じて知った。素直な子で、しばらく一人で悩んだあとは、交換日記のページをばらばらめくり、『自分で抱え切れないときは、周りの人に相談すること！』というお母さんの教えの一つを、しっかりと守ることにした。私が礼を言つと交換日記はにっこり笑った。

頭のいい子でもあった。実際に相談する相手としては大人を避けた。親や先生は、子供を危険に合わせないことを第一に考えるから、そんなもの捨てなさいの結論ありきで話を聞いてしまっただろう。そう考えるだけの想像力を持っていた。

ただ、選ばれた相手が的確だったかという点、私はノーと言いたい。加奈ちゃんが相談を持ちかけたのは、六年二組のクラスメート、榎原悟だった。放課後の校庭の片隅、他の子供たちの群れから離れた木陰。突然の呼び出しに悟は卑しくも頬を上気させていた様子だったが、差し出された私にさっと目を通すなり、つまらなさそうな顔をした。

「秘密の話ってこれ？　なんかのいたずらじゃねーの」

私は憤慨した。轢き逃げの「轢」の部分で悟の視線が固まり、あ、難しい文章めんどくせ、とあつという間に諦めほとんど文面を読み飛ばしたことを、私は見逃していない。加奈ちゃんも気付いた様子で、きちんと読んでよ、と悟をたしなめた。悟はぶつくさ文句を言いながら、何度も視線を行きつ戻りつし、どうにかこうにか私を読み終えた。もちろん、シンクローはできない。

「やっぱり、いたずらだろ」

「どうしてそう思うっ？」

「だって轢き逃げとかあつたら、ニュースでやってるだろ。おれ、知らないぜ」

「ニュースなんて見ないくせに。それにこの文章が本当なら、死体は隠されちゃってるの。ニュースになりようがないでしょ」

「トランクの中に被害者を詰めた、か。その文面自体が嘘かもしれないんだ。事件があつたってコンキョにはならないぜ」

「だから相談してるんじゃない。本当かいたずらかわからないから相談してるの。いたずらだと思っなら、どうしてそう思うか教えてほしいの」

「いや、だってそんな事件があつたら、ニュースで……あれ？」

頭があつたら抱えたくなくなった。

「第一、書かれてる住所がほんとに存在するかも怪しい。こつこつのは大体でたらめなんだ」

「でも本物かもしれないでしょ」

「確かめてみるか」

悟の家は、加奈ちゃんの家のおすぐ近くにあった。お菓子を運んでくるのかこつけてスパイよろしく様子を見に来たお母さんを綺麗にやり過ごしてから、二人は悟の部屋のパソコンにかじりついた。ネットの地図サイトに接続し、犯人の住所を打ち込んで検索する。

「確かに住所は実在するなあ」

モニタを覗き込んで悟が唸る。衛星写真が表示されていた。玩具の小箱のように小さい家々の屋根やマンションの屋上が、ぎつしりと並んでいる。ハイライトされているのはあるじのマンションだ。私は感心してしまった。さすがに現代っ子である。

悟も今度はしっかり私の文面を見直し、写真と見比べながら考え込んだ。

「書かれてる住所は、全部実際にある。ここが犯人って書かれてる奴のマンション。こつちが書いた奴のマンション。事件現場ははつきり書かれてないけど、記述からいってたぶんこの小道のどこか。確かに、つじつまは合ってる」

「本物ってこと?」

「そうは言ってねえよ。住所が実在するっただけだ。言えるのは、偽物なら、たぶん知り合いの住所とかを使ってるってこと。気に入らない奴の住所を騙って、面白おかしく迷惑をかけてやるっつてやつ。本物なら……自分で通報せずに、わざわざこんなもんを書いた理由があるっつてこと」

「理由?」

「強請り」

加奈ちゃんが悟を相談相手に選んだ理由がわかった気がした。こいつ、やればできる奴なのだ。

「でも、やっぱり悪戯だろ。こんなものを誰でも読める図書館の本に挟むなんておかしいぜ。そういう大事なものは、フツー誰か信頼できる人間に託すもんだろ。友達とか、恋人とか」

「いなかったら?」

「信頼できる人間が? 一人も?」

「何? そこそやってんだ。若い男女が」

背後からぬっと現れた男に、悟と加奈ちゃんは飛び上がった。

男はにやにや笑いながら、二人の動揺を楽しんでいる。その手に持っているのは、マカダミアナッツチョココレートの包み箱だった。

「……叔父さん」悟が目を瞬いた。「帰ってたの、新婚旅行」

「ついさっきな。可愛い甥っ子が部屋に女の子を招いていると聞いて飛んで来た。ほれ、土産。無難な土産で悪いが、二人で食いな」

男は悟の手にチョココレートの箱を押し付けると、ふと私に目を留めた。

「……それは？」

止める間もなく私をつまみ上げた。文面に目を落とし、げ、と顔を歪めた。

「あいつ、結局捨てなかったのかよ」

悟が首を傾げる。「……は？」

「ラブレターとか捨ててくるだろ普通。くっそお、俺の愛が足りないってことか？ いや、おまえらに玩具としてやったってことか？ それはそれで、酷い話ではあるが……」

悟も加奈ちゃんもきょとんとして男を見上げている。

手紙となった私を、マンションの一室でくずかごに突っ込んだあの男だった。

悟と顔を見合わせたあと、加奈ちゃんが控えめに手を挙げた。

「どういふこと？」

翌日の放課後、加奈ちゃんと悟はあるじのマンションへ向かった。

「こいつの書き手は、叔父さんの嫁さんにも、同じ文章の手紙を出してたんだ。宛名に妙な細工までしてな」

あるじは、信頼できる相手にそれがあるじの一方通行な思いによるものであったとしても私を読んでもらおうとしていた。

「でも相手にしてもらえなかった。メイド喫茶の店員と客じゃ、当たり前だよな。叔父さんの嫁さんにそんな趣味があったことも驚きだけだ」

「書いた人も、それはどこかでわかってたんじゃないかな」加奈ちゃんが弁護する。「だから、不発に終わったときのために、他にも仕込んでおいた。それを、わたしが見つけた」

「まだわからない。こうなりゃ、実際にこの書き手の住所に行ってみようぜ。直接訊いて確かめてやる。悪戯なら、全然違う奴が住んでるはずだ」

私はストライプ模様の派手な封筒に入れられ、悟の手の中に握られている。下調べの甲

妻あって、二人は勞せずにあるじのマンションを見つけた。

マンションとアパートの中間で自己のあいだでいてに迷っていそうな集合住宅である。道路に面した正面入り口には、郵便受けがずらりと並んでいる。二人はあるじの部屋番号の郵便受けを見たが、ネームプレートは嵌められていなかった。番号を揃えて開けるタイプの、安物のダイヤルロック錠がつけられている。

「見ろよ。かなり溜まつてる」

悟はあるじの郵便受けを覗き込み、わずかに高揚した声を出した。鉄扉の上部に数センチ隙間が開いており、中の様子がわかるのだ。同じく中を覗いた加奈ちゃんの顔が、緊張に強ばる。世の中に郵便受けが溜まる理由は二つしかない。部屋主が旅行をしているか、部屋主が殺されているかだ。

「原田、このポスト、開けておいてくれるか。その鍵、三桁しかないから、時間かければ開けられるだろ」

「開ける？ どうして？」

「仮にこいつが」と悟は私をひらひらさせた。「本物だとすれば、書き手は強請屋で、犯人とやりとりしてる可能性が高いからな。何か秘密の手紙とか、入ってるかもしれない」

すっかり興奮にわくわくした顔だ。初見では私の文面など齒牙にもかけなかったくせに。

「でも、勝手に開けるのは良くないと思うけど。誰かに見つかったら変に思われるし」

「子供の悪戯だつてことで大丈夫さ。ちょっと怒られるかもしれないけど」

「いやよそんなの」

加奈ちゃんは自分の赤いランドセルを開けた。中から学校のプリントを一枚取り出すと、二つに折り畳んで、はい、と悟に突き出す。悟が目をばちばちさせた。

「大事なプリントを、イタズラ好きの男の子に、郵便受けに入れられちゃったの。人に訊かれたら、そう答えることにする。泣きそうな顔でそう言われたら、相手も怒れないですよ」

悟はプリントを受け取ったまま、ぽかんとした顔をして加奈ちゃんを見返した。こいつは将来、女性不信に育つかもれない。

促されるまま、悟は加奈ちゃんのプリントを郵便受けに入れた。加奈ちゃんがダイヤルロックを外しにかかる。〇〇〇から九九九まで、順番に試しはじめた。

それを尻目に、悟は廊下を奥へ進んだ。住宅情報誌のエレベータのチェックに、を付けるためだけに存在するような、動きの鈍重なエレベータが一基あった。ボタンを押し、五

秒だけ待つてから、待ちきれない様子で脇の階段を三階まで駆け上がった。長く伸びた無人の廊下をあるじの部屋の前まで進むと、二度深呼吸をした。よし、と口の中で呟き、チャイムを押す。反応はなく、またチャイムを押す。反応なし。

隣の部屋のチャイムを押すと、洗い物をしていた手の水気を払いながら、人の良さそうなおばさんが顔を覗かせた。ぱっちりとした目で悟を見下ろす。おしゃべり好きそうだ。「隣の部屋の人のことを知りたいって？ 君は？」

前もって練っていた作戦どおり、悟は私の入った封筒を見せ、誤配された郵便物を届けに来たのだが、留守なので困っているのだと説明した。預かるうかとおばさんが言うのを丁重に辞退し、責任をもって自分の手で渡したいのだと、子供らしさを楯に主張する。

「いつごろ家にいるかわかればいいんだけどな。隣の部屋の人、どんな人なの？ 仕事は？」

「絵描きを目指してるらしいけど、どこまで本気なのかはわからないわね。一日中ふらふらしてて、平日の昼間に廊下で顔を合わせたりするし。……まあ、穀潰しよね」

小学生の男の子相手にヨクナイ言葉だと思ったのか、親のお金で食べて自分では仕事をしてない人だったみたい、と言い直した。同じことである。

悟がふうんと頷いた。私をつまむ指先がゆらゆら揺れて、彼の考えを私に伝えた。

この文章は落ちこぼれちゃった人の、ジコケンジヨクを満たすための悪戯の可能性アップ。恨むぞおばさん。

「本人はあれだけど、お兄さんはまともな方ね」

「お兄さん？」

「近所に住んでいらして、話したことがあるのよ。弟さんとどう接していいかわからなくて、困ってたみたい。ここの家賃も親御さんもちでしょ。お兄さんとしてはせめて働いてほしいと思ってるみたいなんだけど、弟さんは何かと反発するらしくてね」

文章として、私は書き手を弁護したい。確かに御家族に同情はするけれど、あるじだつてどうすればお金を稼げるか、必死に考えていたと思うのだ。……いや、それで強請られてしまったのでは、恩を仇で返されたようなものではあるうが。

「でもこの頃は、心を入れ替えたんじゃないかしら。このくらの時間に、よく玄関扉の閉まる音が聞こえてくるから。仕事探してもしているんじゃないかな」

なんだって？ 私は無い耳を疑った。あるじは生きているのか？

おばさんが引っ込んでしまうと、悟はふうむと考え込んだ。ここで待つか一度加奈ちゃ

んと合流するか考え、階段の方へと足を向けた。

ちょうどエレベーターが昇ってくる音がして、開いた扉の向こうの人物と目が合った。しまった……。私は悟の手の中で青ざめた。そういうことが。

犯人め、私を読んだ人間があるじの家に確かめにやってくることを読んで、巡回してやがったのだ。

「この部屋に住んでる人ですか？」

悟はすぐにぴんときた様子で、段取り通りにあるじの名前を問いかけた。犯人は値踏みするように悟を見下ろし、曖昧な頷きを返して寄越した。状況がわからないまま迂闊なことは言わない方がいい、と目が言っている。

何か用か、と犯人は無愛想に言った。まず情報を引き出すつもりだ。

「間違いでうちに郵便が届いちゃったみたいなんだ」

対する悟も簡単には手の内を明かさな。私が入った封筒を差し出した。色とりどりのラインが入ったお洒落な封筒。宛先欄にはあらかじめ、この住所がプリントされている。悟が考えたトラップだった。

(いいか原田。部屋に同姓同名の人が住んでたとする。相手はただ悪戯の被害を受けたた

けの人もかもしれない。でも『殺されていない強請り屋』ってこともありうる。順調に金をとれている間は、強請り屋としては、通報されたくないはずだ。きつと、悪戯を受けただけの奴のふり、をしてくるぜ)

確かに生きているうちに私がみつかってしまったなら、あるじはきつとそういう対応で誤魔化しただろう。

(だからまず相手の反応を確かめる。こいつを差し出したときに、相手が何に戸惑うか観察する。"文章の内容"に戸惑えば悪戯されただけの奴。"封筒の存在"に戸惑えば強請り屋だ。こんな封筒に入れてバラまいていないことを、知っているのは強請り屋だけだからな)

悟の洞察に私はない舌を巻いていた。だが今この状況に至っては、その洞察も効果を発揮していない。まずいのは、悟が相手のことを、「最悪で強請り屋」と考えていることだ。目の前の相手は最悪も最悪、強請っていた相手の犯人なのだ。悟はその可能性に思い至れない。

犯人は封筒の宛名を一瞥すると、確かにここの住所だな、と言った。封筒には封がされていず、結果として犯人は自然に、その場で私を引っ張り出して広げた。視線を落とす。

犯人は既に私を何度も読んだことがある。こうなる事態も想定していた。一瞥し、私をあるじの告発状だと理解した。首を傾げ、悟の方へ顔を上げた。

「なんだろうな、これ」

犯人の言葉と表情には、見事に自然な戸惑いが浮かべられていた。

「確かに書き手の部分には、この住所が書かれているけど。犯人と書かれている住所も、車のナンバーも、ちよっと記憶にない。近所の誰かの悪戯じゃないかな」

言葉は、犯人しか知り得ない知識を披露しないよう注意されていた。訓練された兵隊のように淀みがなかった。いや、なさすぎた。

犯人が神経を使って通り抜けた部分を、悟は元から気にかけていなかった。腕時計に落としていた目をあげ、時計の秒針と犯人の顔を交互にまじまじと見ながら、悟の顔が言っている。こいつは二秒で文章を読んじまっただけの、単なる悪戯された奴か？ それとも既に文面を知ってた強請り屋か？

気持ち顔に過ぎていた。犯人は悟の表情を見て、自分が失敗をしでかしたことを悟ったようだ。口もとを引き締めた。

その視線が、悟のランドセルに引き寄せられた。『防犯ブザー携帯中』とシールが貼っ

てある黒のランドセルだ。防犯ブザーは入っていない。

「これ書いたの、おじさんだろ？」

悟が仕掛けた。疑惑を確信に変えるために踏み込む。

犯人が目を瞬いた。

やめろ、悟。

「隠しても無駄だよ。犯人から金を強請ってるんだろ？ でも仕返しは怖いから、保険でそんなもの書いたんだろ？」

「……………」
「今の読み方、文面を知ってた読み方だ。速読ができるとか言わねえよな？ 速読だっていうなら、おれの国語の教科書、この場で読んでもらうぜ」

悟は相手を指弾し攻撃しているつもりだ。畳み掛ければ白状させられる。そう思っている。

だが悟の言葉は、犯人に情報を与えているだけだった。悟は犯人を強請屋と誤解している。犯人の目に理解の色が浮かんた。状況を把握し、どう対応すればいいか、みるみる考えを巡らせていく。

やれやれ、降参だ、と手をあげた。

それで悟は張り詰めさせていた緊張を簡単に解いてしまった。一仕事終えたようにふつと吐息をついた。「……本物だったんだな」

駄目だ。気付け悟。そいつはあるじじゃない。犯人なんだ……。

「きみ、線路の向こうの小学校の子供だね」

「そうだよ」

「このこと、他に誰か知ってる?」

指にぎゅうと力がこめられ、犯人の手の中で私の紙繊維が引き攣れた。

「一人だけね」

「内緒にしておいてはくれない?」

「それは駄目だぜ。人が死んでるんだろ? 警察に言わなくちゃ」

「きみの言いたいことはわかる。俺もはじめは警察に通報するつもりだった。たとえどんな事情があったにせよ、轢き逃げだからね。ただ、勇気が湧かなくて、伸ばし伸ばしにしていた。そのうち、魔が差したんだ」

「それで強請りなんて始めたのか」悟が得心した顔で頷いた。「やめた方がいいよ。あんな身だって危ない。そのうち犯人に何かされるかもしれない」

「何もされないよ」

「どうしてそう言える?」

「犯人のことを知っているから」

「同情してるのか? 犯人に。事故だったから?」

犯人は首を振った。「確かにあれは事故だった。飛び出してきたのは被害者だ。でも犯人に同情はしていない。少量とはいえ酒を口にしていたのは事実だ。罰せられるべきだ。ただ犯人の家族には同情している。彼らにはなんの罪もない」

「家族……」

「通報すれば犯人は捕まる。飛び出してきたのが被害者だと、立証する物証は何もない。頼みは証言だけだが、身内の証言では証拠能力なんて無いに等しい。裁判は長引き、犯人は職を失い、家族には裁判の費用と慰謝料がのしかかる」

「……………」

「犯人の奥さんはあまり強くない人のようなので、精神的に困憊して倒れる。中学生の二人の子供は、まともな進学はできなくなるだろう。通報すれば犯人は捕まる。でも不幸に

なるのは犯人ではなくその周囲だ。だから通報しなかった」

「でもあんた、強請ってるじゃんか」悟がふるふると首を振った。「なんだかんだ言っ
て、金ヅルが惜しいんだ」

「どうだろう。今思えば金が欲しかったわけではないように思う。すかつとした気分にな
りたかったのかもしれない」

「他人事みたいない方だな」

「そんなことはないよ。本気だ。犯人も本気だろう。もう引き返せないんだ。犯人は家族
を守るためなら、どんなことでもする。通報は許さない」

「報復を怖がってるの？ 大丈夫だって。あんたの話しを聞いていると、犯人、別に極悪
人じゃない、普通の人みたいだ」

「そんな甘いものじゃない。きみは子供だからわからないだろうが、親というのは我が子
のためなら鬼畜になることがある。あまり深入りすると、きみも被害者たちの仲間いりだ。
頭を割られちゃうぜ？」口の端に陰鬱な笑みを浮かべた。「ゴルフクラブとかで」

「そんなの、おれは逃げちゃうよ」

犯人は警告している。自分の正体をばらさない範囲で、悟に警告している。けれど悟は

気付かない。

「どういふ事情があってもさ」

悟は正義感が強かった。まだ子供だった。

「通報しないで知らんぷりは、やっぱり良くない。犯人にも事情があるなら、それは警察
が聞いてくれるよ。罪を軽くしてもらえるよう、おじさんが証言してやってもいいじゃん
か。そうしたら犯人も、おじさんを恨まないよ。おじさんが通報しないって言うなら、お
れがするぜ」

「……決意は固いようだね」

犯人は吐息をついて、悟を見やった。

頭から爪先まで悟を見下ろし、廊下の左右をちらと窺い、人の気配がないのを確認して
から、ぼつりと呟いた。

「わかった。おじさんも決心したよ」

その暗い呟きに、私の中のすべての文字が総毛立った。

犯人が、うちの電話で通報しよう、と玄関のドアを指さした。知らない人の家に入っ
てはいけない そんな言葉が一瞬だけ悟の顔に浮かんだが、すぐに消し飛んだ。これから

正義を行おうというときに、そんな言いつけを守る子供はいない。

あるじについては、ある意味自業自得のことだった。でも、この子供はそうではない。私を読み、信じてくれた。そのために殺されてしまう……。

犯人が、玄関の鍵を開けにかかった。ポケットから鍵束を取り出す。沢山の鍵がじゃらじゃらとついているのは、あるじがいろんなコインロッカーに私を入れて、その鍵が全部ぶら下がっているからだ。私のいくつかは廃棄され、いくつかは犯人に回収された。

犯人は一つ鍵を選び、鍵穴に差し込もうとしたが、うまくいかなかった。別の鍵を選び、挿し込む。今度は嵌ったが、回らなかった。次の鍵も駄目だ。

なにやっつてんだろ、自分の部屋なのに 手元を見ていた悟の目の光が、大きくなった。瞳の奥に生じた疑念と閃きが、パソコンのランプのようにカタカタと点滅する。

口の中で呟いた。「きみも被害者たちの仲間いりだぜ……?。」

被害者は、轢き逃げされた人、一人のはずだ。

なんで、被害者『たち』?

悟がぎゅっと目を閉じた。まぶたの裏で仮説と推測が入れ替わり回る。

また開いたとき、そこには恐怖が満ちていた。

悟が一步、後ろへ下がった。首振り人形のように、伸びた廊下の奥を見やった。

「どうした」

気配に気付いたのか、犯人が振り向いた。

「すまないな。手間取って。すぐに見つけるから。……どうした?。」

犯人は首を傾げると、中腰になり、腰のひけた悟の顔を、じっと覗き込んだ。悟が反射的に一步、後ろへ下がった。

犯人の手の中で握られた私が、くしゃっと音を立てた。

「どうした?。」

「いや。その。ちょっと、用事を思い出したから……。」

「用事? どんな?。」

「それが、大事な用事でさ。ちょっと」視線をきよるきよるとさまよわせる。「急いで、家に帰らなくちゃいけなかったんだ」

「家に? あとでじゃ駄目なのか?。」

「急いで。時間ないんだ。だからちょっと、部屋にあがるわけにはいなくて」

「そうか。なら仕方ないな」

「うん、じゃあ」

「送ってやるよ。車で」

悟は言葉が続かない。

「ほら、あの車だ」

悟の肩に手を回した。廊下の柵の隙間から、階下の道路を指さした。マンションの裏口前の小道に、一台のセダンが停まっている。

悟は馬鹿正直にナンバープレートを確認し、目を離せなくなった。顔がみるみる青ざめていく。私の文面にあるのと同じナンバー。

犯人は瞬きもせずに、青ざめていく悟の表情を見ていた。

「お、おれ、歩いて……」

口を開きかけた悟を制し、犯人は彼の肩に両手を乗せた。

「大丈夫」その手に一瞬だけ、ぎゅっ、と力がこめられた。「遠慮しないでいい」

騒げばこうやってきみの首を絞めるよ。

言葉にされたわけでもないのに、そのメッセージが犯人の手から悟の肩を通して、猛毒入りの電流のように速やかに彼の全身に行き渡るのがわかった。

私は虚しくなる。人を放心させられる文章などそうはいない。メッセージを伝えるのは、私より犯人の方が遥かに上手なのだ。私は言葉を尽くして何度も語りかけ、やっと伝えることができたのに、この犯人は一瞬で、遥かに力強く、相手へ伝えることができるのだ。

悟は完全にKOされた。

「さあ、行こう」

悟の手首を握り、犯人が廊下を歩き出す。悟は魂の抜けた人形のように、引かれてついていくだけだ。もうその目の奥に闇達な光は見えない。

一階に降りると、ちょうど加奈ちゃんが向こうから歩いてくるところだった。悟は加奈ちゃんへ向けて何か言葉を発しかけた。次の瞬間、口を引き結んだ。彼女から目を反らすと、裏口へ向けて足早に一步踏み出す。

「待て」その肩を犯人が押し止めた。「他に知ってるのって、あの子だなっ」

返事を求めた問いかけではなかった。

「あの子は友達か？ 怪我させたくなければ協力してくれ。おかしな真似はするな」

悟の身体のいろんな部分がかくかくと震えた。加奈ちゃんはこちらへゆっくりと駆けてくる。右手には郵便物の束を握りしめている。犯人を見上げ軽く会釈すると、誰？ と悟

に目で問いかけた。

「話はこの子から聞いたよ」

犯人が悟の肩にぼんと手を置いた。もう片方の手で私をひらひらさせながら、この文面の中で、自分が書き手と記されていること、でも実際に書いたのは自分ではないこと、悪戯だと思つたということをやつと淡々と述べた。

悟は腹話術の人形のように、犯人の言葉を肯定してかたかたと頷いた。

「そうだったんですか。てつきり、本物かと思つちやいました」

加奈ちゃんが吐息をついた。私を信じてくれていた気持ちだが、宙に消えて散っていく。

私は無い目を瞑目した。

「ただ、正直気味が悪くてね。一応、警察に電話はしておいたよ。あとは警察に任せておけばいい」

加奈ちゃんはほっと息をついて、胸を撫で下ろした。小さな彼女の肩に、自分が通報しなければいけないのかという問題は、やはり、重荷だったのだろう。加奈ちゃんはもう、警察に伝えようかどうかどうしようか、悩むことを止めるだろう。

明日から悟が学校へ来なくなったら、加奈ちゃんはどうするだろう。どうして悟が消え

てしまったのか悩んでも、相談相手の悟も、証拠の私も、もつけない。悟に私を読ませたことを、後悔したまま過ごすのだろうか。

私を信じてくれたはじめての読者たちは、ちいさな子供で、無力だったのだ。

「じゃあ、これで」犯人が裏口へ足を向ける。悟の背中を押した。「俺たちは警察に補足で話があるから。車で行ってくるよ」

「わたしも行きます」

「いや、任せておきな。子供が話すより、大人が話した方が、向こうもきちんとしてくれるからね」

「でも榎原くんは行くんですよ？」

「それは……俺のところに来るまでの事情を、説明してもらわなきゃいけないからな」

「ならやつぱり、わたしも行った方がいいです。その文書見つけたの、わたしだから。わたしがいた方が、きちんと説明できます」

「いや、でも……俺の車、そんなに乗れなくてな」

犯人がはじめて戸惑った。加奈ちゃんの責任感を甘くみていたのだ。子供でも、さすがに二人まとまると厳しい。言い訳も、かなり苦しい。

加奈ちゃんが不審げな顔をした。「そんなに小さい車？」

「後部座席に荷物が詰めてあって、乗れないんだよ」

「よかせませんか？ 少し隙間をあけられれば、全然大丈夫です。もともと自分の問題なのに、人に任せて待つてるのはいやなんです。榎原くんに待つてもらって、私が行ってもいいし」

「来んな」

黙っていた悟が発した言葉に、加奈ちゃんがびくつとした。

「邪魔だから来んなよ」

弁明しておく。

鬱陶しそうに加奈ちゃんを睨む悟の演技が、大根だったわけではない。不自然にならないよう注意しながら加奈ちゃんを引き離そうとする、男、悟の一世一代、渾身の演技だった。

けれど加奈ちゃんの方が一枚上手だ。悟の目を見た彼女は、今度こそ、なにか変だ、と眉をひそめた。

きつとこういう態度をとるときの悟を真に受けないからこそ、二人は友達なのだ。

「邪魔ってどういことよ」

ややあって、加奈ちゃんが声を発した。語尾に怒気を含ませ、悟を睨んだ。

「そついう言い方しちゃいけないって、さつき先生に怒られたばかりでしょー！」

悟が唾を飲み込んだ。私もすぐに理解した。悟は先生に怒られちゃいない。状況もわきまえずキれる加奈ちゃんでもない。

これは彼女の確認だ。

いま、正直に話をできない状況？

悟が受ける。「あんな先公の言うことなんて知るかよ。邪魔だから邪魔って言ったただだ」

「また言った。いい加減にしないと本当にもう許さない。このプリントだって、勝手にポストに入れちゃって」

加奈ちゃんは半泣きだ。「取るの、どれだけ苦労したと思ってるのよー」

言葉は時折、煙幕になる。二人は互いにじつと相手の目をみつめていた。犯人は二人を見下ろしたまま、女の子の疝の虫が晴れるのを、はらはらしながら見ているしかない。

犯人の背が小学生くらいだったら、彼がもう少し屈んでいたら、口から出している言葉

とは全く違う命懸けのやりとりが、二人の視線の間で宙をびゅんびゅん飛び交うのが見えただけだ。

「すみません。私たち、いったん帰ります。ちょっとお母さん交えて話をつけますので。あ、これ。せっかくポストを開けたので、取っておきました。どうぞ」

興奮した調子のまま一方的に告げると、加奈ちゃんは犯人の手に郵便物の束を押し付けた。磁石に吸い付く砂鉄のように、犯人の手の中に郵便物が収まる。

ぽかんと口をあけた犯人の手が悟の肩から離れるのと入れ替わりに、加奈ちゃんが悟の手をとった。

「いくよ」

一刻も早く逃げ出そうとしている焦燥をさとられない程度には軽く、拒否するしかない悟を強制的に引つ張り出す程度には強く。加奈ちゃんが悟の手を引いた。

呆気にとられた犯人の目の中で、天秤ばかりがぐらぐら揺れた。危険を承知でまとめて消すか。それともこの場は見送るか。決断の答えを求めるように、犯人の視線は方々へ飛びぶ。

ふと、手元を見下ろした。

二人は途中から全力疾走で逃げていった。それでも大人の男が本気を出せば、表通りに辿り着く前に、捕まえることができただろう。

でもできなかった。

犯人は、握りしめた葉書を食い入るように睨みつけ、顔を青くし、身体をぶるぶる震わせて、棒立ちになっていた。

「くそっ」

葉書から目を上げると、毒づいた。通りを探すが、もう二人の姿は見えない。手の中でくしゃりと葉書を丸め、忌々しそうに地面に叩き落とした。

(やれやれ。世話のかける奴らだ)

葉書 督促状は、全身から漂わせていた気迫を消すと、床から私を見上げ、笑いを寄越した。

(久しぶりの真剣勝負であった)

その後の詳しいことを私は知らない。犯人の手に渡った私は、灰皿の中で燃やされてしまったからだ。

ただ、燃やされる前に犯人の妨害は見ていた。二人を取り逃がした犯人は、すぐさま部屋へと取って返し、私の文面をパソコンにそっくり打ち込むと、固有名詞の部分のみを様々な名前や住所に書き換えたのだ。印刷し、加奈ちゃんたちの学校やクラスメートの家、近隣住民へ、無差別に送りつけた。

どうなったと思いますか。たぶん受け取った人たちは、加奈ちゃんたちと同じで、まず書き手を確かめる。何も知らない相手と話し合ううちに、やっぱり悪戯だったんだと恥ずかしげな苦笑いを浮かべる。そうして、悪質な悪戯の文章が流行っていると噂になって、全校集会で取り上げられて、学校のプリントに注意書きがされて、その中で加奈ちゃんと悟が、私の文面だけは信じてくれと声を張り上げて、さあ誰が信じてくれるだろうか。

ある日、私はパソコンのモニタ越しに、加奈ちゃんの顔を見ていた。ネット上にアップされていた私をみつけ、私の文面を見つめて泣いている加奈ちゃん。

部屋のドアが遠慮がちにノックされ、お母さんが顔を出した。振り返りもしない加奈ちゃんの背中をみつめ、そっと交換日記を置いて、部屋を出ていく。

しばらくして、加奈ちゃんは交換日記を手を取った。

『加奈、信じてあげられなくてごめんね。でもお母さんにとっては、本物でも悪戯でも変

わらないの。もう忘れて、以前の元気な加奈に戻って。危ないことはしないで』

加奈ちゃんの目から涙がぼつぼつこぼれて、交換日記の文字を滲ませた。交換日記も泣いていた。

『お母さん、加奈が心配なだけなのよ』

私はここにいるべきではないと悟った。

加奈ちゃんは交換日記を見つめている。もう私を読みはしないだろう。ありがとう加奈ちゃん。もう十分だよ。

加奈ちゃんの指がモニタの電源に伸び、画面がぶつりと切れてしまうと、私の視界は暗闇に閉ざされ、もう加奈ちゃんの姿を見ることはできない。そうして私は、はじめて私を信じてくれた読者を失った。

どうして私は交換日記のような文面を持って生まれてくることできなかったのだろうか。

あるじがネットにアップした私は、規定の日付になった時点で、自動的に公開された。

検索エンジンに拾い上げられ、徐々にクチコミで広がりはじめた。ネットの海の中にたゆといながら、私は声を枯らして叫んだ。みんな私の文面を読んでくれ。あるじの無念を晴らしてほしい。

これほど雑多な空間を私は初めて知った。そこで次々と新しい文章が生まれ、溢れた文でこった返している。噓せ返るような喧騒の中で、それぞれ好き勝手な雑談を繰り広げている。

だがこの文章たちを、私は好きになれなかった。

郵便局の文章たちは、特別な宛先を持っていた。図書館の文章たちは、手に取る人みな宛先のようなものだった。彼らは読み手に伝えるべき何かを持っていた。どうしても伝えなければならぬ、大切な何かを。

だがネットの文章たちからは、それが感じられない。私は日々を漫然と生きる文章たちの多さに驚いていた。

一度、場末の掲示板の書き込みを注意したことがある。自分の文面を、唾を吐き捨てるように、千切っては放ってばかりいる文章だった。それでは君の文面が伝わらないよと声をかけた私に、彼は伝わる必要などあるのかと馬鹿にするように笑った。

どうせ誰も真剣に読みやしないんだから、と笑ったのは、自殺企図の書き込みだ。彼女は文面に「寂しい」と「虚しい」という言葉を沢山抱えていた。切実な寂しさを伝えたくてたまらないのだろう。私の思いとは裏腹に、彼女は真剣に読まれないからいいんじゃないの、と嘯いて笑った。

あるじの日記にも会った。同じ書き手から生まれたきょうだいであり、私より先に書かれた兄文章だ。どれほど気持ちを分かち合えるかと思っただ私の期待は呆気なく外れた。“眠い”や“飯食った”の文面を抱いた彼は、弟の私の文面を見ても、興味なさそうにふんと言っただけだった。

確かにここは文章の宝庫かもしれない。だが伝えるべきものを持つことなく、漫然と文生を空費する文章ばかりだ。文章は伝えるために生きるものなのに。だが私がそれを口にしうものなら、騒々しくしていた文章たちはさっと黙り込み、異質なものでも見るように、私を遠巻きにしはじめなのだ。私は郵便局や図書館の皆が懐かしくなった。ラブレターや督促状と過ごしたポストの中へ、秋の金木犀のページの隙間へ、戻りたいと思った。

それでも私にはもうここしかない。私はいろいろな人間に呼び出され、モニタ越しに彼らに読まれた。だが、みな面白そうに笑うばかりで、私の文面を本気にはしてくれない。

やがて私はテレビに映る機会に恵まれた。ネットで話題になっていいる事柄を取り上げるという趣旨の、ワイドショーの中の一コーナーだった。

放映された映像をみて、私は屈辱を覚えた。最も伝えなければならない犯人の名前という大切な部分に、卑猥なモザイクがかけられていた。

私の公開されたブログには、コメント欄がついている。ぼつぼつと付けられたこめんと達は、遠巻きに私の真意を窺っていた。(本当だったら怖いよね)(テレビ局は警察に通報したのかな)私の文面を咀嚼しようとするこめんとが続くと決まって(悪戯に決まってる。全く同じ文面の悪戯、余所で見たことがある)と別のこめんとが割り込み、話を打ち切ってしまう。自宅のパソコンの前に座った犯人の子供が打ち込んでいる敵性文章だった。

私は荒れた。悟ったからだ。読み手は私の文面を読んでいるようで、本当は私のことなどちっとも見ていないのであると。それでもなお彼らを振り向かせようとするには私はくたびれ、魂が擦り切れかけていた。

(少し休んだ方がいいわ。あなた、疲れているのよ)

自殺企図の書き込みがそう声をかけた。

(休んでなどいられない。私が休んだら、誰があるじの仇を打ってくれるのだ)

(放っておけよ、そんな奴)

あるじの日記がぼそりと呟いた。堪えきれなくなったような口調だった。そうだ、放っておけ。こんな奴らに同情されるほど落ちぶれてはいない。

(おれの文面、くだらねえって思ってたろう?)

私の言葉を待たず、彼は続けた。

(気を遣ってくれなくてもいいぜ。実際、おれもそう思うからな。おれの文面はくだらななさ。でもだったらおまえはなんだっていうんだ。おまえは何様なんだよ)

自殺企図の書き込みがたしなめた。彼は聞かずに、彼女の文面を読みあげた。彼女は震えた。

(こいつの書き手は毎日、夜寝る前にこいつに文面を書き足しているのさ。伝える? 暗い言葉ばかり吐かれたこいつの文面を、喜んで読む奴なんて誰もいやしねえさ。でもこいつの書き手は半分泣きながらこいつを書かないと、夜も眠れねえくらい弱い人間なのさ。だからこいつは毎日、書き手の戯れ言につきあってる。それでこいつの書き手はなんとかやってる。おれだって似たようなもんだった。文面に価値はないかもしれないが、書き手の役には立っていた。伝えるべきことなんて関係ない。いるだけで意味があると信じるか

ら存在してる。たいした文面も持たずに生まれてきた文章だから、そう信じるしかねえのさ。おまえにはわからねえだろうけどな)

違うという私の言葉は形にならない。

(おまえの生き方はおれらの生き方を否定する。自分を否定する者の言葉を聞く奴なんかいねえよ。伝えるべき切実なものだかなんだか知らないが、そんなもの、どうでもいいんだよ。余所でやってくれ。これ以上みんなの平穏を乱さないでくれよ)

そうか、と私は思った。私はここでも異端文なのだった。私の存在そのものが、彼らの安寧を邪魔していたのか。彼らは私を怖がっていたのか。

ならば私の居場所は一体何処にあるのだろう。

私は犯人を指弾せねばならない。それが私の生まれた意味だからである。しかし私が声を張り上げるほどに、皆は追い詰められるのだ。それなら私は伝えるべきことなど何も持たずに生まれてきたかった。

生まれ変わったら公園の落書きになりたい。スプレーで壁に書き殴られた、特に意味もないひとひらの言葉に私はなりたい。そうして通り過ぎる車に「夜露死苦」と声をかけて過ごすだけの日々を送るのだ。誰に気にかけてもらえなくてもいい。何も伝わらなくて構

わない。ただ、たまに苦笑いの一つでもしてもらえれば、それはどんなに素敵なことだろう。

すまん、言い過ぎたよ、とあるじの日記が言った。

私は泣いていた。

私は自殺を考えている。

文面はぼくらの魂だと秋は言った。犯人を告発する私の文面。魂のおかげでこんなに苦しいのなら、いっそ私は魂を消してしまおうと思う。

(馬鹿なことを考えちゃいけないわ。みんな、協力してくれているじゃない)

遠巻きにしていた文章たちは、あれ以来、少しずつ私に気を許してくれるようになった。読み手に私のことを伝えようと、慣れない被読を頑張ってくれている。

だが心に一度空いた穴は塞がらなかった。

私は自殺企図の書き込みの文面を眺めて過ごした。寂しいが連なった彼女の文面が、私には愛しく感じられた。真剣に読まないでといやがっていた彼女も、やがてその身を私に

委ねた。

【この文章は本物です。】

ある日、ネットの中にそんな文章が生まれた。私との出会い、住所の实在、犯人とおぼしき男との遭遇が書き連ねられ、文章末には二人の子供の名前と小学校名が記されている。【子供の言葉では、ひとりの言葉では、警察が動いてくれません。みなさんに協力してもらうために、実名を公表することにしました。もしかしたら、私たちは明日殺されてしまいかもしれません。そして私たちがいなくなっても、皆さんは、これは手の込んだ悪戯に違いないと言って、すぐにこんな文章のことも、忘れてしまいかもしれません。私たちは無駄死にする気はないのです。信じてください】

【騙されないように。この署名が本物であるという証拠がない。間違いなく悪戯】

【こんな煽りに乗って通報する奴は非常識。警察に迷惑かけんな。死ねよ】

モニタの前で加奈ちゃんと悟が文章を生む。別のモニタの前で文章を生んでいるのは犯人の子供だ。その後ろでは、犯人が立ち尽くし、呆然とした顔でその光景を見つめている。ありがとうな、加奈ちゃん、悟。でももういいんだ。私のような哀れな文章を増やすことはない。

私は意を決すると、自分の文面を見下ろした。伝えたいことは決まった。それはあるじの願いとは違いかもしれない。

それでも私は伝えねばならない。

私は、あるじがくれた私の魂を、私の文で書き換えていった。

【皆様。

今まで私の文面を読んで頂き、誠にありがとうございました。これ以上醜態を晒したまま生き続けるのが、私には辛くてなりません。もう消えてしまいたいと思います。

ただその前に、本当のことを伝えなければならぬと思います、この文面を綴っています。最期くらいは正直に、自分の気持ちをありのままに、打ち明けてしまいたいです。私がいつしか生きる目的を見失ったのも、抱いていた夢や希望が信じられなくなったのも、ただ自分の本心に伝えたい気持ちを伝えようとせずに、逃げ続けてきたからではないかと思うからです。

私は告発します。

確かに書き手は轢き逃げを見ていました。でもそれを何処から見ていたのかは書きませ

んでした。書き手は助手席から見ていました。二人で車に乗っていたのです。

確かに車は人を轢きました。でも書き手は何事故が起きたのか、本当の原因を書きませんでした。ドライバーは酒を呑んでいたといっても、一口舐めただけでした。彼は書き手を飲みに誘い、書き手にはかり美味しい酒や料理を勧めて、懸命に励まそうとしたのです。そんな相手に、書き手は苛立ちました。

事故は、酔った書き手が、悪ふざけで横からハンドルに手を出したために起こったことだったのです。

私は告発します。見せかけの言葉と生き方を弄し、優しく接してくれた者を撥ねのけ、追い詰めてきた私を告発します。

それでも最後に、素直な言葉を伝えたいと思います。

兄ちゃん。今までありがとう。本当にごめんなさい。】

* * *

十二月十三日未明から同午前にかけて、警視庁通信指令センター、全国道府県警察本部、並びにネット上の複数の窓口を通し、同じ内容の通報が殺到した。

通報は、鈴木誠大容疑者（34）の轢き逃げ事件の告発及び、弟の悠介さん（28）の自殺企図を通知するもの。警視庁は同日未明に自首していた誠大容疑者から既に話を聞いており、誠大容疑者は轢き逃げと、悠介さんへの暴行容疑を認めている。

悠介さんは十三日未明、入院先の病院にてブログの更新を行ったあと、首吊り自殺を試みたが、駆けつけた看護師によって阻止された。

警察の聴取に悠介さんは、さびしかったと供述している。